

歌誌『りとむ』より



追憶 一九九二 七月号

故郷を離れて五年 黙しゆく

われに五月の村祭りあれ

故郷の貌めざしゆく暁けがたを

眠れ一樹のなかのさちこよ

「思いきり泣かれよ」終の故郷は

夢二も春の風に吹かれて

故郷に帰ればへのへの茂次郎と

呼ばれし君も詩を好みしか

南天は赤きがゆえに風さわぐ

今日元旦のわれの貌にも

ながき冬のはてに在りしよ雪蘭は
あわき紫色に耀う



卓上に置かれし花の清からん
祖母去りゆきし四月初旬は

故郷へ涙するなり花かげに
祖母の遺影の暖かかりき

妙高の峰輝けり追憶も
なにか杏子の花咲くように

潮の満つるを

一九九二年 九月号

はにかみて帰る山道燦々と

われにも紅き陽はふりそそぐ

緑なすはこべら萌えている野辺に

祖霊いませり我をまもりて

われもまた生かされて在り卓上の

一輪ざしにバラの芽吹くは

はつなつの夢や遥けき故郷の

夕べ聴くなり潮の満つるを

千年を花咲きいづる故郷の

木立ちもわれの祖先たちの裔すえ



忘れがたき秋

一九九二年十一月号

仕送りの少なきを分け呑む酒の

にがきも忘れがたき秋なり

柿の実の蒼き少年山荘に

夢二待つらし誰を待つらん